



八  
談

ル 4  
1387  
8



門 八 呂 4  
編 1987  
8



撰陽群談卷第八

撰志編集

○野ノ部 歌、各所附り牧

住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

家集イヘ 住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

夫木ツキ 住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

浅澤アサザ 小野コノ 同郡住吉野二属ス

万七 住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

續ツグ 下シタ 住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

風カゼ 一ヒト 住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

遠里トヲリ 小野コノ 同郡遠里小野村ニアリ

万六 住吉スミヨシ 野ノ 住吉郡住吉村ノ北東二属ス

撰陽群談卷第八

續拾 衣の多きあつてやむをきとて此の邊乃後了 津守國平

新勅 仁まじ此の山風子にむしをき小中乃まのわけの 覺延法師

夫木 尋々や藤おらんけり乃と成里小野のまに里人 為家

百濟野 東生郡小橋村ヨリ天王寺ニ至ノ 至ノ

間ニ属ス今百濟ノ号ヲ失コト郡ノ部並

川ノ部ニ論之ハ雲御抄勅撰名所集夫木

集各攝津國ニ比ス

万八 くらり此の務のまをままといひ當ありはらん 赤人

同 くらり此の務のまをままといひ當ありはらん 仲実

水無瀬野 嶋上郡廣瀬村水成瀬野ニアリ 道因法師

續日本後紀卷第八云仁明天皇養和六年

正月辛丑行幸水無瀬野遊獵云々

同十一年二月壬戌行幸水成瀬野賜扈從

群臣侍從已上及攝津國司等祿云々野ニ

讀ル歌未考川野等ノ歌其部ニアリ

三嶋野 同郡三嶋江村ニ属ス伊豆國ニ同

名アリ 延喜式云攝津國嶋上郡三嶋藍

野云々神社並ニ陵ノ部ニ論之

鳥飼御牧 嶋下郡鳥飼村ニアリ今ノ俗馬

鳴ト云處ナリ 延喜式卷第四十八云

凡諸節及行幸應用國飼御馬者勸量須數  
奏聞乃下官符令進唯牧放飼馬者寮移當  
國國即令牧子牽送但攝津國鳥飼牧豐嶋  
牧不攝津國寮直放繫  
凡國飼御馬者攝津國十疋右寮  
同式云攝津國鳥飼牧九寮云

古傳日記云二月八日狩川のほりまつて多良乃  
少技といふほりまつて多良乃

豐嶋牧 豐嶋郡牧村二属ス

延喜式卷第四十八云攝津國豐嶋牧右寮  
右諸國所貢馬中各放件牧隨事繫用云々  
續日本後紀卷第十云養和八年十一月丙

寅朔丁卯攝津國地三百町為後院牧云々  
右何毛牧ト讀ル歌未考

昆陽野 川邊郡昆陽村ニアリ

猪夫木 秋五名野 同郡猪名寺村二属ス有馬郡有馬  
衛道ニアリ三代実録卷第三云詔賜九

大臣從一位源朝臣信攝津國河邊郡為奈  
野為遊獵之地云々同卷第廿四云貞觀  
十五年八月癸巳朔勅賜攝津國河邊郡為  
奈野於二品行中勢卿兼上野太守光孝親  
王以為遊狩之地勿禁百姓樵薪云々



縣佐伯部獻苞苴フホハ天皇令膳夫以問曰其苞  
苴何物也對言牡鹿也問之何鹿也曰免メ餓  
野時天皇以為是苞苴者必其鳴鹿也因謂  
皇后曰朕比有懷抱聞鹿聲而慰之今推此  
伯部獲鹿之日夜及山野即當鳴鹿其人雖  
不知朕之愛以適逢猶獲猶不得已而有恨  
故佐伯部不欲近於皇后乃令有司移卿于  
安藝津田此今津田佐伯部之祖也俗曰昔  
有一人往免餓宿于野中時二鹿卧傍將又  
鷄鳴牡鹿謂牝鹿曰吾今夜夢之白霜多降  
之覆吾身是何祥乎牝鹿答曰汝之出行必

為人射而死即以白鹽塗其身如霜素之應  
也時宿人心裏異之未及時爽有獵人以射  
牡鹿而殺是以時人諺曰鳴牡鹿矣隨相夢  
也云々同六十二年額田大中皇獵于  
關鷄云々振津國風土紀云雄伴郡有夢  
野父老相傳云昔者刀我野有牡鹿其嫡牝  
鹿居此野其妾牝鹿居淡路國野鳴彼牝鹿  
屢往野鳴與妾相愛無比既而牡鹿來宿嫡  
所明目牡鹿語其嫡云今夜夢吾背不零  
於祁利止見支又都須久紀州生多利止  
見支此夢何祥其嫡惡夫復向妾可往乃詐

神代卷第八

五

相之曰背<sub>上</sub>生<sub>州</sub>者矢射<sub>背</sub>上<sub>之</sub>祥又雪<sub>零</sub>  
 者白<sub>鹽</sub>塗<sub>完</sub>之祥汝渡<sub>淡</sub>路野<sub>嶋</sub>者必遇<sub>船</sub>  
 人射<sub>死</sub>海<sub>中</sub>謹勿復<sub>往</sub>其牡鹿不勝<sub>感</sub>憲復  
 渡野<sub>嶋</sub>海<sub>中</sub>遇逢行<sub>船</sub>終為<sub>射</sub>死<sub>故</sub>名<sub>此</sub>野  
 日<sub>夢</sub>野云<sub>此</sub>野<sub>二</sub>於<sub>テ</sub>大<sub>山</sub>守<sub>之</sub>納<sub>夕</sub>几  
 氷<sub>室</sub>ノ舊<sub>跡</sub>トスル<sub>事</sub>同<sub>屋</sub>ノ部<sub>二</sub>詳<sub>也</sub>

夫木 秋三 同 同 同 同 同  
 乃てよつはの姫の船にのりてはあかす麻の色にきく  
 同 月ヶは波とて歌ふやあかん射鶴中の麻の髪を  
 同 西行上人  
 鴨長明

湏磨上野 同郡湏磨村ニアリ

女計小野 方角未考夫木集振津國ニ比ス

上小竹葉野 方角未考藻鹽振津國ニ比ス

堀百 綱引のまの浦名にあらはるをいふ事也(田代傳)

安倍野 東生郡安倍今何部野村ヨリ住吉

郡住吉ニ至ノ間ヲ云リ歌各所阿倍野ト

讀<sub>ハ</sub>桐<sub>摸</sub>駿<sub>河</sub>ノ兩國ニアリ此所ハ安

開<sub>嶋</sub>轉<sub>ジ</sub>夕<sub>几</sub>處也嶋夕讀<sub>ハ</sub>歌<sub>其</sub>部<sub>ニ</sub>

○同俗名所 附 暇

谷野

アリ往來人家遠シテ道冷シ世俗貪狼ノ  
輩ヲ指テ阿部野街道ト異名ス  
車暇クルママタテ 西成郡新城村ニアリ所傳云昔此處  
ハ小栗判官紀州熊野山本宮温泉ニ赴ノ  
車道ナリ因テ車暇ノ号アリト云リ  
稚子暇 同郡垂水村ニアリ所傳云昔此所  
ノ長者岩氏ト云者アリ西成郡長柄橋ヲ  
造ル人柱ナクテ成就シ難キニ依テ岩氏  
其人ヲ撰ニ纏シタル袴着夕ラン者ヲ捕  
テ沉ムベシトノ約ヲ成テ改之岩氏が着  
タル袴然之其誓約シ許ス終ニ捕ト成テ

水底ニ入又因テ橋成就ス岩氏一人ノ娘  
アリ羨容世ニ勝テ紅顏朝日ヲ嘲ハカリ  
也是故ニ号テ光照前ト稱ス然ルニ成長  
マテニ不言シテ啞ノ如シ母ノ悲歎限り  
ナク深ク藏之于爰河内國交野郡禁野里  
ノ何某是ヲ意テ垂水ノ家ニ遣テ迎之辭  
シ難シテ終ニ禁野ノ家ニ遣猶言サル  
ゴト久シ夫怪ンテ亦送り歸ス此暇ニ至  
ル時稚子ノ鳴聲ノ夫尋ヨリテ射之於干  
是光照歌云物言ハ長柄ノ橋柱鳴ス  
ハ稚子モ射ラレサラマシト緑返シ吟之



雉子暇



夫驚キ母ノ許ニモ行テ禁野ニ歸ル悦ビ  
 アヘリ時人雉子暇ト号ク今ノ世ニテモ  
 袴ニ經スル事ヲ忌ル諺ハ其是縁也ト云  
 リ先照モ父ノ後世ヲ問タメ終ニ薙髮自  
 不言尼ト法号シテ裁松寺ニ入り後ニ又  
 山城國山崎ノ邊ニ不言尼寺ヲ創ス當  
 國大願栽松兩寺ノ里然リ  
 野川邊郡菰野村ノ郡原ニアリ野末ノ  
 廣ヲ以テ扇子野ト稱スルヤ亦菰野ノ地  
 名ヲ誤ル故也  
 同郡東多田村ニアリ所傳道細シテ

曲ルニ因リ土俗艱野乎ト云リ  
 襟野 有馬郡香下村ニアリ同郡尾寺村有  
 馬富士ノ羨景ヲ移テ襟野ノ号アリヤ此  
 所歌名所羽束山ノ景色ニ因ル歟  
 未野 同郡東未村ニアリ所傳地名ニ因リ  
 此處塚穴多アリ  
 春白野 免原郡上野村ニアリ所傳不詳一  
 説治養四年庚子平相國清盛公福原京日  
 リ野遊ノ興ヲ催ノ處也羨景ニ因テ題之  
 此外野畷等ノ号所々ノ郡原ニアリト云  
 凡地名村里ノ名ニ因ル耳所傳不詳因テ

略之原松原等野邊ニ准フト云凡部二分  
 テ次ニ記ス  
 ○原ノ部 歌名所附森林松原  
 依羅原 住吉郡庭井村ニアリ  
 萬七 海のくさむものゝおとせし  
 松原 同郡住吉村ニアリ  
 五 あられ物も雲もつらふはなれはむねがくれわぬも  
 夫亦 小原あつた雲を系信のあつた吹風もあつたあり  
 同 くら風もあつた松原あつたまよふもあつた信の波  
 同二 冬もいさ日ぬつりあつたまよふもあつた松原  
 長皇子 御子  
 行家 定忠  
 僧三 行意

岸松原 同郡同所ニアリ

夫木 比吉の名乃松原とありりつた是れ此處にありと云ふ 同郡同所ニアリ 夫木集撰津國二

比ス神社ノ森ノ一名也

夫木 六月のあしらの親知の記りにあやあやん 資陰

同 六月のあしらの親知の記りにあやあやん 資陰

依羅森 同郡庭井村ニアリ

夫木 依羅森の記りにあやあやん 資陰

味經原 東生郡二属ス方角所指不詳和名

類聚東生郡味原トス 日本書紀卷第二

十五云孝徳天皇白雉二年冬十二月晦於

味經宮讀二十一日餘僧尼徒讀一切經云

万五 上畧 長柄乃宮と云ふは 味經宮の記りにあやあやん

下畧 下畧 味經宮の記りにあやあやん 味經宮の記りにあやあやん

御津松原 東生郡方角津ノ部ニ論之

万五 大伴の記りにあやあやん 御津松原の記りにあやあやん

同七 鈴木の記りにあやあやん 御津松原の記りにあやあやん

難波森 同郡森村ニ属ス森ヲ讀ル歌未考

日本書紀卷第七云推古天皇六年夏四

月難波吉士磐金至自新羅而獻鵲二侯乃

俾養於難波杜因以築技而産之云々

長柄森 西成郡長柄村ニ属ス杜ヲ讀ル歌

未考ト一部養永釋日本紀秘訓云奈加江乃

杜ト云々大名寄撰津國ニ比ス

神南炎 嶋上郡神内村ニアリ

嶋上郡神内村ニアリ

古今人傳りたりて... 源実

後撰 神皇正統記... 讀人不知

宇治園白... 秋乃

長家

新勅 神皇正統記... 長家

盤手... 同郡安満村ニアリ

續古 志也... 馬良侍

夫木 志也... 源頼細

幣森 嶋下郡耳原村ニアリ

右延喜式神名帳撰津國嶋下郡幣久良神

社ノ表也

垂水 豊嶋郡垂水村ニアリ 藻鹽撰津國

ノ名所ニ比ス夫木集同之

夫木 志也... 俊成

猪ノ名原 川邊郡猪名寺村ニ續ク處也 下名

猪ノ名原 川邊郡猪名寺村ニ續ク處也 下名

猪ノ名原 川邊郡猪名寺村ニ續ク處也 下名

猪名庭原或ハ猪名即原猪名等原氏云リ

續古 十次 隆社 かはもく井原のり系たり花柳秘すまぬ月とさる部

拾遺 志多猪名乃坤りり花柳秘すまぬ月とさる部 ヨリ人不知

續後 拾九 猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 志家

家集 九 ぬれのまもゆら尾よりわきまゆいまたはりり 慈田

其本 四 ぬれまももまきまゆら尾よりわきまゆいまたはりり 法世等、道開白

昆陽 松原 同郡昆陽庄内ニアリ

新後 拾遺 猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 等持院

家集 猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 家隆

夫本 十一 押忍猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 仲業

山下 同郡篠部村山下ニ属ス各寄撰津

國二比久和名類聚河邊郡山本トスルヤ

名寄 猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 信実

姫嶋 松原 同郡二属ス方角所指不詳

日本書紀卷第十八云女開天皇二年秋九

月甲辰朔丙午勅大連云宜放牛於難波大

隅嶋與媛嶋松原莫垂名於後云

續古 十次 中務卿親王 ぬれまもゆら尾よりわきまゆいまたはりり

羽 東 有馬郡香下村ニアリ一説山城國

トス和名類聚有間郡羽東 波一耳云々

拾五 猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 慈鎮

後撰 猪名乃乃の字も亦一宿とあされいまたはりり 讀不知

角<sup>ツノ</sup>松原 武庫郡津門村ニアリ古事紀角宿  
稱或ハ都努臣ト出夕リ藻鹽撰津國武庫  
郡角松原トアリ

五七 あましめいりさくはれはしくおぼのねりうほほる  
六世ニヨリもまゝもやまの多ははたの松原いづれに

生田<sup>ナマタ</sup> 免原郡生田村ニアリ

詞花 三秋 云々 同イ物とほのまけし白乃雪の秋まゆ風 僧都清満

夫木 秋ニ まるきく回乃秋風も秋のまゆりやまきまきえ 俊成

御影<sup>ミカゲ</sup> 同郡御影村ニアリ山城國ニ同名  
アリ此所松ヲ讀ル歌雜類門ニ比ス名寄  
撰津國トス本俗日影<sup>ミカゲ</sup>松<sup>マツ</sup>比云リ

駒<sup>ウマ</sup>之林

夫田部郡駒林村ニアリ

名寄 いあ乃駒林の松をいふにちかきものあり 康頼

往<sup>キ</sup>合<sup>アヒ</sup> 方角未考一詠住吉郡住吉松ノ一

名トス名寄歌枕撰津國ノ名所ニ比ス

名寄 風ふかき子あや海人喜と秋のけ合乃表 中務

洵<sup>シロ</sup> 方角未考夫木集撰津國ニ比ス

夫木 雜四 夕まはれしもの法乃下ま秋りけるまあやま 俊成

磐<sup>イハ</sup>瀨<sup>セ</sup> 方角譯歌未考能因法師歌枕撰津

國名所ニ比ス

雪<sup>ユキ</sup> 方角譯歌未考右二同じ

藤<sup>フジ</sup> 方角譯歌未考右二同じ

勢比惠原 方角證歌未考右二同シ

○同俗名所

岡山 東生郡岡村ニアリ所傳山ノ部ニ

アリ岡山ノ松林也

安房 同郡天王寺村ニアリ此所社アツ

テ世ニ安房天神ト稱ス因テ安房ノ野トス

勝曼 同所ノ北ニアリ勝曼院ノ邊又ハ

テ呼之此安房ノ中ニ毘沙門堂アリ因テ毘

沙門ノ安房云リ

今宮 西成郡今宮村ニアリ此所ニ蛭兒

神社アツテ今宮ト稱スルニ因リ

天神 松原 同郡天満ニアリ往昔世所ヨリ

北西ニ續テ天満山上稱スルノ松原ナリ

今漸ク天神ノ社地ニ殘リ世ニ天神安房ト

云リ社記其部ニアリ

本庄 松原 同郡本庄村ニアリ所傳地名ニ

因リ

麻茅原 嶋上郡成合村金龍寺ノ麓ニアリ

所傳云能因法師此原ニ放テ表女ノ屍ヲ

見テ淺茅原トトフ黒髮眼目下テ誰カ手

枕ノ上ニ置テ詠吟シ給ヘ公屍動出

中ヨリ枕ヲ上成得ル心一度シテ亦モ

トノ如シ終ニ爰ニ埋<sup>イ</sup>印ノ石ヲ置テ弔<sup>ト</sup>ヒ  
 給<sup>タ</sup>フ處ナリト件ノ和歌ヲ板ニ記シ是ニ  
 建<sup>タ</sup>置<sup>コ</sup>ト今猶然リ因テ歌ノ五<sup>ツ</sup>文字ヲ取  
 原ノ名所ト成テ世ニ令<sup>レ</sup>知之云々  
 高濱松原 嶋下郡吹田村高濱ノ地ニアリ  
 所傳濱ノ部ニ論之  
 樂<sup>コ</sup>田鞆<sup>カ</sup>森 川邊郡安鞆村ニアリ所傳ニ云  
 往<sup>レ</sup>昔聖德太子仲山寺<sup>カ</sup>州<sup>カ</sup>創ノ時驪ノ蹄ヲ  
 休<sup>タ</sup>タマフ處安鞆ノ地名ト成リ因テ此<sup>カ</sup>森  
 ノ号モ出<sup>タ</sup>タリヤ文字來<sup>レ</sup>歴等不<sup>レ</sup>詳<sup>カ</sup>  
 於<sup>レ</sup>木<sup>カ</sup> 同郡同所ニアリ此<sup>カ</sup>森<sup>カ</sup>多<sup>ク</sup>クテ  
 多<sup>ク</sup>クテ

夕ルバカリ也  
 菴松原 免原郡御影村南濱邊ニアリ所傳  
 不<sup>レ</sup>詳一説涼松原ヲ證トスト云リ  
 和田小松原 矢田郡郡兵庫ニアリ建武年  
 中<sup>ニ</sup>本<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>孫<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>郎<sup>ノ</sup>遠<sup>ノ</sup>夫<sup>ノ</sup>射<sup>ノ</sup>タル處濱ノ部ニ然  
 リ俗名所森林原松原等ハ大概村里ノ地  
 名ニ因リ或ハ神社佛閣等ノ圍ニシテ俗  
 因<sup>レ</sup>縁<sup>ノ</sup>ノ詳ナル事ナシ因テ皆略之<sup>カ</sup>多<sup>ク</sup>ハ亦  
 其中ヨリ松ノ名木ヲ拾テ雜類門ニ比ス  
 ○田ノ部歌名所俗名所附井水  
 住吉御田 住吉郡住吉社前ニアリ小



田或ハ濱田ト号ス世俗御田ト云リ

萬葉歌 伊弉諾の小田に伊弉諾の御田を奉りて

伊弉諾の御田を奉りて

夫木 子南より伊弉諾の御田を奉りて

日替 伊弉諾の御田を奉りて

住吉岸田 同郡住吉邑二属ス一名岸上田

岸上田 氏云リ

万十 伊弉諾の御田を奉りて

風雅 伊弉諾の御田を奉りて

夫木 伊弉諾の御田を奉りて

同 伊弉諾の御田を奉りて

志水 住吉郡住吉淺澤小野ニアリ志井ハ

伊勢國ノ名所也

風十 伊弉諾の御田を奉りて

續十 伊弉諾の御田を奉りて

九神 伊弉諾の御田を奉りて

便宜水 同郡住吉社ニ属ス夫木集云

志水 伊弉諾の御田を奉りて

兼八 月夜に伊弉諾の御田を奉りて

世新利者像成乃云云

あつた文字はききよ

おはりまつはるの水

清補録

類政

定頭

経國

云

人六呂

宗長

為家

同人

田村奇事云々... 泉もく... 泉もく...  
泉もく... 泉もく... 泉もく... 泉もく...  
泉もく... 泉もく... 泉もく... 泉もく...  
泉もく... 泉もく... 泉もく... 泉もく...

白石玉出水 東生郡四天王寺院中ニアリ  
一名龜井水ト稱ス水鉢石ヲ以テ亀ノ  
ヲ造リ 聖徳太子傳曆云此地敷七寶  
故青龍恒守護麗水東流號曰白石玉出水  
以慈悲心飲之為法藥矣云云 此水上金堂  
ノ下ニアリ  
新古  
北秋  
續後  
撰載  
夫木  
雜八  
白の玉出水と云ふは...  
白の玉出水と云ふは...  
白の玉出水と云ふは...

代村長養寺境内ニアリ

水 鳥上郡垂水村ニ属ス一説能勢郡水

代村長養寺境内ニアリ

万八

夏三 櫻井 同郡櫻井村二属又能因法師歌枕授

夫木

津國二比ス一説豊嶋郡野畠村ニアリ

櫻井

同郡櫻井村二属又能因法師歌枕授

同

○同俗名所

同

榎坂清水 康生郡四天王寺西重門ノ西二

同

アリ一説小坂水氏云リ地名大坂ノ號二

同

論之此水荒陵ノ池水西ニ漏ル麗水ナリ

同

極暑數日ノ旱乾ニモ潤コトナシ數奇有

同

同

必此水ヲ求ム

落合水

同所四天王寺東門ニアリ四方ノ

水是ニ浸ヲ以テ落合ノ号アリヤ所傳不

詳

在栖清水

同所四天王寺村ニアリ水ノ清

コト相坂ノ水ニ同シ此所在栖山清水寺

觀音淨刹アリ皆是麗水アルニ因リ

難波清水

大坂津南瓦屋町ノ市店ニアリ

此水上難波藥師ニアリ

愛宕水

同内久寶寺町ノ市店ニアリ始此

清水ノ側ニ就テ愛宕大權現ノ叢祠在テ

毎年正五九月及七月廿四日諸人群聚  
因テ清水ノ號ニ殘リ叢祠ハ終ニ山城國  
愛宕山ヨリ押留テ破壊ス神像將軍地藏  
一軀並ニ來由一軸ハ伊木本道堅家傳レ  
テ今猶然リ  
難波井 西成郡難波村ニアリ民家悉雖求  
之水渴スル事ナキ灑水ナリ  
山下水 嶋上郡別所村ニアリ所傳云能因  
法師金龍寺ヨリ出テ此清水ニ影ヲ移シ  
足曳ノ山下水ニ影見レハ眉白髮ニ我老  
ニケリト讀タマヘル歌ニヨリ水ノ名ト

成ト云リ何ノ水モ山ノ下行水ハ下水ト  
云ヘレヤ歌名所トスルノ證未考  
佐井水 嶋下郡佐井寺村ニアリ寺記ニ云  
行基菩薩當山ニ登リ此井ニ向ヒ香水ヲ  
汲玉ヒ自ラ佐井水ト号ト云リ  
辨慶鏡水 豊嶋郡瀬川村ニアリ所傳云壽  
永年中源義經公ニ從テ西國進發ノ時武  
藏坊武具ヲ堅テ形容ヲ此水ニ移シ見タ  
ルヲ以テ号タリト云リ  
明神水 同郡下院村勝尾山境內ニアリ寺  
記云諏訪明神當山ニ化現シテ此水ヲ汲

真鳥年次卷第八  
廿九

シメ諸經ヲ書寫シ給フ是ヲ以テ明神水  
ト号祭ル是則天竺國ノ白鷺池ノ水ヲ設  
タル處也至于今山内僧佛經ヲ書寫スレ  
バ必此水ヲ設ル也元亨釋書ニ所載寺記  
詳ニシテ其部ニ比ス  
染殿井 同郡池田村ニアリ吳織穴織ニ神  
社家記云應神天皇御宇吳國ヨリニ女神  
來臨シ給ヒテ始テ此井ニ綯ヲ染タマフ  
處ナリ土俗此水ヲ穢ハ必神罰アリト云  
リ猶神社門ニ詳ナリ  
水槽清水 同郡伏尾村久如寺山内城山ノ

原ニアリ是則古城ノ用水也ト云リ數日  
雨ナフシテ水不乾亦淫雨洪水スルト云  
氏濁サルノ名水也  
幣木井 能勢郡余野村ニアリ所傳云當鄉  
氏神客神ヲ得玉ヒ此井ニ采ヲ洗シ人饗  
應アルノ由ハ水必濁テ白ナル事毎歲時  
日定ラスレテ然リト云リ  
石清水 同郡川尻村天台山ノ齋ニアリ所  
傳云弘法大師開伽水ニ汲玉フ灑水ナリ  
石ノ間ヨリ涌出スルヲ以テ大師稱号シ  
給フト云リ至于今旱魃セス

要略

七

揚水 川邊郡尾崎天野氏第宅ノ地ニアリ  
 亦同郡難波村ニ同ジ名水並ニ名木アリ  
 所傳云 仁徳天皇御宇難波梅清水ノ側  
 二在テ落花亭テ水薫ク味輕ク如毛湯ス  
 儿事ナシ時人梅水ト稱ス或人云落花水  
 二淳テ鶯井邊ヲ不去因テ以テ鶯宿水ノ  
 名アリト云リ世ニ難波梅ト題スルコト  
 咲耶木花ノ製歌ニ因リ雜類門ニ比シテ  
 詳ニ論之ヲ

金剛清水 同郡伊舟村市店ノ西ニアリ所  
 傳云畫工金剛  
下条院時人姓戸勢常此

水ヲ汲シ人筆ヲ洒テ畫之至テ今澗コト  
 ナレ因テ以テ金剛清水ト号ス  
 行基水 同郡昆陽寺ニアリ此水行基菩薩  
 當山開基ノ時藥師佛ノ寶前ニ於テ自ラ  
 封スルノ灑水也瘡瘡ヲ患ル者求之吞シ  
 メ或ハ煎湯ニ用テ法藥ト成シ與之ヲ  
 大悲水 同郡仲山寺ニアリ寺記云仲哀帝  
 光后大仲姫ノ遺骸ヲ當山ニ納ム應神帝  
 勅侯ヲ于是遣シメ給フ皇后ノ遺體化シ  
 テ巖ト成リ白鳥山頭ニ飛リ清水其跡ヨ  
 リ涌出ス其由ヲ奏シテ于是行幸勅シテ

長陽神茶卷第八  
 此

龍水ト号祭旨趣シ石ニ刻シメ泉底ニ埋  
 給フ後亦聖德太子敬禮シテ大悲水ト改  
 号シ玉ノ名水也  
 筒井清水 有馬郡上津畑村ニアリ所傳云  
 昔筒井氏山莊ノ舊地シテ号之云リ  
 高塚清水 同郡湯山ニアリ所傳筒井同シ  
 獨鈷水 同郡各鹽村ニアリ所傳云弘法大  
 師於于是大巖道ニ曲リ旅人ノ煩ヲ救シ  
 夕メ獨鈷シテ傍ニ刻落シテ往來ヲ安  
 カラシム其獨鈷ノ當ル處灑水涌出ス同  
 テ号之一名戸窪清水トモ云リ以上三ノ

清水ヲ指テ有馬三木ト稱ス  
 梅雨井 矢田郡郡丹生山田庄原野村栗花  
 落理丸衛門第宅ニアリ水ノ涌出ル間長  
 四尺餘渡三尺深一尺常ニ無水而如平沙  
 梅雨ニ入テ必涌出ス其水口ノ數ヲ以テ  
 入梅ノ日ヲ定ム因テ以テ地主ノ姓ト成  
 世ニ粟花落丸衛門ト稱ス五月粟ノ花ノ  
 落ル頃必ス梅雨ノ時節成カ故三字ニ作  
 家記云始祖山田丸衛門尉眞勝雅名九ハ  
 人皇四十七代廢帝天皇御宇朝ニ奉仕ス  
 于時橫裁右大臣豐成卿息女白瀧姫ヲ意

攝陽神宮卷第八  
 北七

テ耶ト云ヤリ又白滝一首ノ和歌ヲ送ル  
雲ダニモ懸又嶺ノ白滝ヲサメ三十懸ツ  
山田男ヨト讀テ及ナキナンド云テ難面  
カリケレハ猶アコカレ又是ニ返事申ハ  
得サスベシト有ケレバ眞勝ヤカテ水無  
取ノ楸葉ノ糸ノコカルニ山田ニ落ヨ  
白滝ノ水ト書テ送リケレバ豊成郷使カ  
心サレノ淺カラ又事ヲ感レ終ニ帝ニ奏  
シテ白滝ヲ眞勝ガ家ニ送ル慮不淺眞  
勝ニ天國御鏡長二尺六寸五分也ヲ賜又當家重寶  
ノ第一也白滝世ヲ早ス于時仲夏ニ當リ

遺骸ヲ第宅ノ東境ニ葬ルベシト也終ニ  
納藏テ叢祠ト成シ辨賊夫ト祀祭ル其地  
ニ就テ地水涌出シ至子今梅雨ヲ知シム  
白滝女ハ和州當麻寺ノ開祖中將法女ノ  
妹也ト云リ元亨釋書云天平寶字中  
僕射藤拱佩有女性無世染不納聘禮專志  
安養七年六月入寺薙髮云々是則世ニ云  
中將法女也勝寶字ノ間廢帝ニ當レリ  
是ヲ廢帝天皇御宇トシ又藤拱佩ヲ横秋  
右大臣豊成郷トスル歟  
自然居士并同部兵庫津福嚴寺境内ニア

長崎縣史卷第八 湯

廿三





梶原  
鏡井

梶原井 同郡生田宮村神社境内ニアリ俗  
 傳云壽永年中ノ戰場梶原平三景時此井  
 水ヲ結テ武運ヲ生田神ニ祈ル因テ梶原  
 井ト号ト云リ  
 ○湯ノ部歌名所俗名所  
 郁間出湯 有馬郡湯山ニアリ浴室一宇ニ  
 シテ湯槽深三尺餘堅横ニ丈程ノ中間ニ  
 板壁ヲ隔テ南ヲ一トシ北ヲ二トス湯ヲ

リ寺記云居士暫當寺ニ居テ此井ヲ掘シ  
 ム水清シテ渴スル事ナシ居士舊跡ハ舊  
 屋ノ部ニ載之ヲ

守儿民家北軒ヲ北坊トシテ南北相分り  
 昔ハ當山藥師佛ノ十二神將ヲ表シテ十  
 二坊アリ後世温泉次第ニ繁榮シテ八坊  
 ヲ加テ今ノ北坊ト成リ是ヨリ以下ノ民  
 家旅客ヲ留ルヲ以テ小宿ト云、北坊、舎ゴ  
 トニ二婢アリ一人ハ大湯女ト稱シ惣テ  
 嫁家ト呼リ一人ハ小湯女ト号其家々ノ  
 名ヲ定テ代々ニ傳之、二婢相共ニ入浴ノ  
 旅客ニ湯ノ廻リヲ告知シハ諸國混金ス  
 ルト云、氏終ニ其巡ヲ不違幕湯幕間扶嫌  
 追込等ヲ分ツ其幕湯ト云、ハ世ニ留湯ト

稱シテ一人ノ為ニ幕ヲ曳シメ他ノ人ヲ  
 止ム又幕間ト云ハ其留湯ニ浴スル人揚  
 出ルノ後其儘入浴スルヲ云、リ亦扶嫌ト  
 云、ハ幕ヲ取テ未ダ人集之時也追込ハ貴賤  
 男女ヲ分タズ湯槽ニ亂入ヲ云、リ室内ニ  
 ハ晝夜燈ヲ置コト藥師堂ノ側報恩寺ヨ  
 リ役仕ノ僧ヲ出シテ入浴ノ旅客ニ廻リ  
 湯ノ内ノ燈明錢ト号、勸テ集之、亦温泉及  
 町中掃除ノ役仕間錢ト号、ケ旅宿ノ間數  
 二應ジテ令出之、是則温泉中興開祖仁西  
 上入大和國高原寺ヨリ連來ルノ末裔也

開山行基菩薩中興仁西上人ノ木像毎年  
正月二十日温泉ノ入浴初トテテ雨像兩裏  
ヲ巡シ二十坊ヲ始トテ地下ノ諸人供  
奉ス別當僧祭之所謂北坊並ニ小湯女ニ  
定傳ルル人名一之湯ヨリ記之

御所坊	旗女	眞之坊	敷女
伊勢屋	竹女	中之坊	常女
尾崎坊	柳女	楠宜屋	杉女
大門	初女	角之坊	蘿女
上大坊	栗女	若狭屋	市女
二之湯			

池之坊	松女	下大坊	鍛女
休所	武女	川崎屋	彌女
萱之坊	紀以女	川野屋	満女
大黒屋	繁女	素麴屋	藤女
兵衛	小夜女	水船	止女

以上北坊舎也諺曰温泉入浴ノ旅客筆毛  
馬ヲ引或ハ重藤子白羽矢ヲ持セ鷹ヲ居  
ル者當山ニ入バ青天俄ニ曇リ風山シ動  
シ雨洪水ヲ成シ雷電地ヲ響カスコト甚  
奇也不知之旅客ニ告テ件ノ忌物ヲ村ノ  
外ニ置シメ山内ニ入ル事ヲ許ス昔當領

温泉記卷第八  
北六

主爰三狩入温泉守護山神假ニ羨一女ト現  
シテ麓ニ遊フ領主怪之弓ヲ以テ山中ニ  
追半腹ニシテ眼忽闇三馬ヨリ落又恐テ  
狩スル事ヲ禁ム其乘タル馬羣モ其弓溢  
藤其矢白羽ナルノ縁ナリ鎮守湯谷権現  
並ニ寺院旧跡名物等ニ至一テ皆分テ拾  
之亦温泉入浴中養生記家々ニ在テ湯文  
ト稱シ欠シク傳之其文云

凡湯入多れば湯身まのぬく湯もくくして心頓一色  
葉樹乃為号觀幸の伝を唱へ湯邊湯又及る若急く  
事わづらふ事作乃為号八通湯はるる

一湯法有りありといふは湯を引たり  
湯はゆき水有るハ湯湯あれしるすけはきよりく  
すけく湯すればきとあさひ風はらわく血腫とをし気分  
あけしとぬ痛じ前と後ほむ湯乃極極さるらぬ  
ハ飲茶あれしと分法を知れば飲又と汗つとけりて  
血腫ととも胸をたつと神くらとあくやらたらめや  
たらあつたつと酒はもろくは茶あれとともまより  
毒もあり後ハ味むらわゆしあれとこれと味あきや  
一大こき出せ入人ハ一月ニ度すらも毒しられ細くもや  
此分かつともくよわたりハ大まきとれとわれの毒病やあ  
とく生湯甲斐あれ入れつとれとあつたけ

一船りさゆく入す船々存る  
 一湯ハねんたふかしあふたれん熱もどきか熱いれん風  
 一ちんちんすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすすす  
 ありあつたかかかかかかかかかかかか  
 一舎後りすすりさ湯入るるん熱もどきか熱いれん風  
 一湯係乃向ハ向きへ湯ゆわさるるん熱もどきか熱いれん風  
 一さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき  
 一屋さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 一さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 一さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

如も又りゆくあつたかかかかかかかかかかかか  
 是もくささくあつたかかかかかかかかかかかか  
 一痛まあつたかかかかかかかかかかかかかかかか  
 又湯されん熱いれん風もどきか熱いれん風  
 一是もくささくあつたかかかかかかかかかかかか  
 くるあつたかかかかかかかかかかかか  
 一湯係乃向ハ向きへ湯ゆわさるるん熱もどきか熱いれん風  
 一さかきさかきさかきさかきさかきさかきさかきさかき  
 一屋さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 一さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき  
 一さきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

湯は乃同き湯に...  
 一 ぬれぬれ...  
 一 是より内...  
 一 ...  
 一 ...  
 一 ...  
 一 ...  
 一 ...  
 一 ...  
 一 ...

日本書紀卷第九十三云、舒明天皇三年秋九月丁巳朔乙亥幸于根津國有間温湯冬十月丙戌朔戊戌天皇至自温湯同十年冬十月幸有間温湯宮是歲新羅百濟任那並朝貢云々  
 同十一年春正月乙巳朔壬子車駕還自温湯乙卯新嘗蓋因幸有間以闕新嘗云々  
 同卷第二十五云、孝德天皇大化三年冬十月甲寅朔甲子天皇幸有間温湯左右大臣羣卿大夫從焉十一月晦天皇還自温湯而傳武庫行宮也云々  
 羅山文集温湯記云、本邦撰州

有間郡山口莊之溫泉赤詳其始也舒明天  
皇三年秋九月行幸于此十年冬行幸于此  
孝德天皇三年十月朔行幸于此十一月晦  
出溫泉宮還于務古行宮務古後曰武庫也然  
則此溫泉之所從來已久矣舊記曰聖武帝  
時行基法師自武庫郡昆陽寺來於溫湯見  
一人病卧山中問曰汝何疾病而若是哉病  
者答曰欲赴湯救疾而力疲不得進且絕食  
已數日願上人扶我行基哀之與飲食病者  
曰吾欲食鮮魚今食無魚行基乃至長洲濱  
得魚以飯自剖其半病者曰能剖魚之信

我基又自熟而供之病者曰上人先試嘗之  
基即食味甚美於是觀之病者卧食之且告  
曰我有黑瘍患之將洗以湯上人若舐瘡瘍  
痛楚可少忍乎其體膚焦爛甚臭穢不可近  
也基忍而舐吮焉忽見其形瘦作全身即藥  
師佛之身也基大驚拜佛告曰我在溫泉山  
為試上人現病軀言已不見基感歎不止即  
寫如法經埋于泉底又刻等身藥師石像置  
于泉涌出處就建一字安藥師像今藥師堂  
是也以其所剖之殘魚放昆陽寺池化為一  
目金魚云此山有三神一曰湯山權現者藥

師一曰三輪大神者毘盧舍那一曰鹿舌明  
神者千手大悲也尔来浴者其病多愈蓋依  
佛神加彼力乎兼德元年丁丑天依滂雨洪  
水崩山溺家九十五年後和州吉野僧仁西  
詣熊野神一夕夢神告曰攝州有間山中  
湯道歲荒廢甚矣汝可往從事西曰以何為  
證神曰庭樹葉在蜘蛛道隨其絲所牽以赴  
焉翌日覺而見果然既而至中野村二本松  
下失蜘蛛西迷道而立俄有一翁導西登山  
投木葉曰葉落處必是靈地忽不見翁所之  
遂就其攸開舊跡浚湯源建寺及十二坊舍

置守湯人時建久二年辛亥二月也享祿元  
年及天正四年癸酉鬱攸之災堂舍人屋皆  
為鳥有十三年乙酉羽柴秀吉公之夫人鼎  
建寺院納封田今巍然者是也云々

溫泉沸鬪沸石盤 病可除兮垢可刪  
這裏提醒長水子 本然清淨忽生山

二十神 堀後 同 夫木 雜八 同慮  
めりしき神業成る傷り神あるを湯にひき出湯成り 賢賢  
あつちのくまの山に湯のうき世もあつちの湯に 忠房  
いづれはるるに物といふもあつちの湯に 兼昌  
あつちの湯に 俊成  
あつちの湯に 俊成  
あつちの湯に 俊成



山路湯 矢田部郡中宮村山路古城邊二屬  
 ス亦免原郡住吉野寄岡本横屋魚崎靑木  
 田中以上七箇邑ヲ山路庄ト号スルニ因  
 テ此庄内ト云ノ一説アリト云氏古跡ト  
 成テ所指不詳或ハ此邊海ニ近クシテ潮  
 ノ汲湯トスル軟猶歌各所トスルノ證雖  
 未考詞花集歌ノ詞書ニ出タルヲ以テ是  
 ニ比ス

播戸もよりの耐三月より舟より乃舟り侍り  
 守末は乃山治とて小糸儀あり遠船は湯湯  
 わて侍り乃やあまはりり守り

詞記 乃あまはりり守り乃やあまはりり守り

○同俗名所

妬湯 有馬郡湯山谷之町ニアリ所傳云昔  
 或人妻妬テ妾ヲ殺シ相共ニ此泉底ニ沉  
 テ終ニ湯毛潰テ終ニ残り今毛此金池ノ  
 邊ニ立テ歎戀ハ水漏反ルト云ノ説ナリ  
 羅山文集云妬湯此湯善治瘡湯泉之傍數  
 十歩在一小湯形如盆池其沸少計俗名曰  
 妬湯夫愚溪之愚貪泉之貪濇泉之濇之類  
 中華既在之豈可枚舉哉吳隱之酌貪泉曰  
 試使夷齊飲終不換此心由是觀之若文王

在上任奴在內使天下無曠夫無棄婦則此  
妬湯縱至於滌漫何得使人為娼妬子奈其  
不然何哉彼長門宮未聞有妬湯也而陳皇  
后頗妬忌方今國適委亂而睿賤婦姑郭  
碩而園門聚塵或豈此妬湯云哉崇替去來  
之甚者其寵減乎掌上者蓮眼裏有棘以新  
間奮故以邑而事人者也裹而愛施壁感之  
害也豈遯男女之欲而已哉君子小人亦然  
故書曰人之在技媚疾以惡之不能保子孫  
黎民亦曰殆哉嗚呼不可不懼而戒矣  
坊部紅顏嘆琵琶 上湯白髮向窓紗

長門華泣萬行泣 流作浪湯波浪華  
目洗湯 右同所二了リ 羅山文集云目洗  
湯善治眼疾 湯在温湯谷之側其形如妬湯  
昔伊莽諾神行禁紫橋之小戶以潮襟眼夫  
潮水由地中行故闕地而何處不在水哉然  
則以洗目湯謂之橋小戶之支流亦何害乎  
夫眼有數眼季有肉眼有化眼有法眼有道  
眼有天眼有仙眼有佛眼有見而不見不見  
而見者佛眼也仙眼也見三千刹界如見  
上菴摩果者天眼也道眼也觀心見性者法  
眼也視而不知者化眼也一醫作障者肉眼

湯部紅顏嘆琵琶

法法

也今此湯洗何眼目耶一洗了洋銀々又洗  
分明鑿々金篦刮膜要用汝眼誠器開看奈  
何若有我儒言之眼仰視俯察者安義之眼  
也達四目者有虞氏之眼也不見是圖者夏  
后氏之眼也望道而未見者文王之眼也視  
觀察者孔子之眼也非禮而不視者顏子之  
眼也十目所視者曾子之眼也視其瞬子者  
孟子之眼也聖賢之眼自洗之以何哉不以  
湯也况外藥乎然則如何哉唯還吾宜以讀  
書一隻眼

雜道三年曾患眼 瘳由洗滌涌湯功

上之湯 紬流不擇一消滴 明月清風眼海中

俗傳二云天正十七年羽柴秀吉公見二  
遊王七於是杖ヲ以テ地ヲ敷キ此處二七  
温湯涌出アヲバ我々ニ浴セントシテ作  
玉へり足下ニ於ニ温泉ト成リ仍テ上之  
湯或ハ願ノ湯在太秀吉公薨御ノ後谷ノ  
三殘ルト云リ

平野湯 川邊郡平野村糸神平野ノ社衛門  
ノ下ニアリキ俗ノ傳ニ太往昔ノ温泉山也  
今總水涌出ス然リトヘハ病ヲ治スル

湯湯詳卷第八

三十四

古同知儿者説之沐浴宗女開之依  
 鹽尾湯 武庫郡伊力志村ニアリ  
 昔人ノ云此湯山ノ半腰ヨリ鹽氷涌出ス  
 是ヲ汲テ温湯トナシ浴スル者病愈愈  
 二寺院有テ鹽尾寺ト号ス救世ノ像ヲ安  
 置又是偏ニ觀音ノ冥助也ト云リ亦此山  
 以面村ニ續ラ以以面ノ湯尾去リ一説有  
 馬温湯流レクダ儿餘水ト云寺院モ此鹽  
 水ニ仍テ其号アリ亦鹽尾ノ号ニ仍テ鹽  
 ノ尾ノ湯ト云歟  
 芦屋湯 免原郡芦屋村ニアリ

俗傳ニ云往昔爰ニ於テ塩湯涌出ス今  
 馬ノ湯筋也ト云イツノ比カ退轉ジテ今  
 ハ古跡ト成テ名ノニアリ  
 里之湯 東生郡四天王寺茶臼山ノ南ニア  
 リ世俗ニ云此所昔温泉アリ故ニ湯屋ノ  
 里ト云何ノ世ニカ退轉セリ中頃寺院有  
 テ其古跡ヲトリ湯屋寺ト云モ亦絶テナ  
 シ今念佛寺院内ト成テ其奮泉ヲ慕ヒ井  
 ヲ掘シメ湯屋ノ井ト号儿ノ傳説也

摂陽群談卷第八終

